



朝鮮通信使の来日(12)

『第十二回・文化八年(一八一二)』

通信使対馬易地聘礼

斎藤弘征

難航する来聘交渉

今回の聘礼は、將軍逝去から来日まで実に二十五年という気の遠くなるような歳月を要しました。国情により来日計画は両国の間で縫れに縫れたのです。背景には老中松平定信の「寛政の改革」の根本思想がありました。江戸幕府・朝鮮府のはざ間で苦しい対応を迫られる対馬藩の様子、対馬歴史民俗資料館収蔵の宗家文書(以下「文書」)「江戸・朝鮮往復書状」等に述べられています。

客館は国分寺に「対馬易地聘礼」(「易地」とは場所を易えること)を巡って、幕府・対馬藩・朝鮮府との間で熾烈な駆け引きが展開されている最中、早々に現地対馬では槌音高く町並み作りが進められていました。幕府からは十二万両ほどの大金が支給されました。文書「客館御造作記録」には、信使客館国分寺に御取立方、追々江戸表示談を得、国分寺に御議定之有り候に付、左の趣相達す。御国の儀信使来聘の御用場に相成り、客館国分寺に相設けられ候。之に依り紙末の屋敷々々御入用之れ有り候間、住居の面々、屋敷計りに而も、また者家屋敷共売り上げ歟或い者替地等、望みの趣書付を以て御勘定奉行へ申し出るべき旨、相関候筋々夫々申し渡さるべく候(読み下し)、とみえます。今で言う「立ち退き命令」です。幕府からの潤沢な資金を得て、対馬藩はたいへん強気でした。

その客館は文化三年四月に棟上があり、同五年三月に成就しました。このときの使行録「東槎録」(柳相弼著)は、頗る満足のゆく建物であったことを述

べています。朝鮮国の人々のために温突部屋も設けられていました。

対馬藩信使船航海の支援

信使船の航海を支援するため、対馬藩は万全の体制を整えていました。文書「狼煙之覚」にみるその体制は以下の通りでした。「信使釜山浦より御関所へ渡海の合図先規の通御関所(佐須奈)より狼煙を段々立て続け、大筒をも打ち、哥舞曾根にて火を合わせ、鉄砲を打たせ、市ヶ峰にて昼は帆を揚げ、夜は大提灯を以て渡海知らせの合図いたし候。所々御番所より山伏貝を吹き申すべく候に付き、佐須奈着船と相心得らるべく候(読み下し)、とみえます。文書「信使記録」には、「三月二十九日(新曆五月二十日) 晴天：今午の刻比信使船滞無く、騎ト船四艘共に廻着致し外屋ら以江繋ぐ」と当日の様子を報告しています。見物に詰めかけた「島民の男女老少は林の如く」(「東槎録」)でした。

府中の日々

このとき信使一行は三三六名、幕府側からは上使小笠原大膳大輔以下六七九名が来島していました。府中はしばしば繁華な国際都市の観だったことでしょう。聘礼中藩主義功は、病態で十四歳の若君岩千代が公務を代行しました。岩千代の言語、行動が極めて伶俐なことに信使たちは感銘を受けています。

信使たちは滞在中に珍しい体験をし、市民と心置きなく交流もしています。四月八日には棧原屋形で観燈節があり、信使たちもそれぞれ提灯を一個ずつ作って屋形に赴き、市民に混じって宴を楽しみました。端午の節句が近づき五月の風に鯉幟が泳ぎ、街頭は花竿や綿幢で飾られ、華やいだ往来を男女が混じって新しい衣服を着て、楽しげに語らいながら行き交う光景に心和ませ、市中見物に出掛けた街路では、町の娘たちと親しげに戯れあっています。

頃は夏の季節、下官の使員たちが八幡宮前で納涼の余興を始め、楽を奏でて囃し立て、歌舞も飛び出すと余興はいよいよ賑やかとなり、肩脱ぎ、肌脱ぎ果ては遂に裸体となって獅子舞のようでした(「津島日記」)。

草場珮川「津島日記」

この対馬易地聘礼のとき、肥前多久藩(現佐賀県)からやって来た学者・詩人の草場珮川がいました。珮川はこのとき「津島日記」を遺しています。日記は対馬の地理、風物、人情、朝鮮通信使の様子等を記録した貴重な報告書です。この日記中の圧巻は、天才とも思えるその絵画力です。豊かで鋭い観察力・表現には驚かされます。信使たちもこぞって珮川の絵を求めたといわれています。各町の図書館にこの「津島日記」の影印本がありますのでぜひご覧になって下さい。

別れの朝・府中湊

信使たちに別れの朝がやってきました。晴れた夏の日(新曆八月十五日)の朝でした。その時の情景を「東槎録」は、「風向きが良好なので諸護船も一斉に帆を挙げて海に出ると(前日は久田浦に停泊していました)、見物する男女老少が林の如くであつた。其の中に顔見知りの禁徒倭(藩士)と伝語倭(通詞)達が或いは手を挙げて仰いで揖(おじぎ)をし、或いは手を挙げて扇子を振ったりするが、別れを名残惜しむ意があつた」と述べています。

異国の文化を漂わせながら親しみあい、街に溶け込み旧知の仲となった府中の人々との賑やかな別れでした。「通信使はまたやって来る、見送りながら思うたに違いない府中の人たち。が、これが最後の朝鮮通信使となりました。これ以後府中湊に装飾の朝鮮通信使船が浮かぶことはもうなかったのです。(さいとうひろゆき・対馬市文化財保護審議会委員)